

## 第5回カツオ資源調査・保全分科会議事録

日 時：平成29年10月2日（月）12：00～14：00

場 所：高知大学 地域連携推進センター 2F セミナー室

出席者：受田座長、山崎副座長、千頭副座長、市川（事務局）外 資料：参加者リスト

### （1）座長挨拶

第1回から第4回分科会の議事録に基づく議論の要点および当分科会の立ち位置と方向性の再確認を座長から行った。また、今年度のWCPFC会合の日程（12月3日～7日）の確認、および、来年11月に予定される全国豊かな海づくり大会をターニングポイントとすることの確認を行った。

第5回分科会と第6回分科会で具体的な提言とロードマップをとり纏めることを確認した。

### （2）ディスカッション

座長から、当分科会は“保全”に資するための調査を議論することを前提とすること、今回と次回で成案に導きたいこと、これらを出席者と確認した。

#### 【概略】

- ・島嶼国では既にカツオ漁が産業として定着されており、産業合理性の観点から漁獲効率向上や取得単価軽減に向かうことは当然であり、これを止めることは難しい。短期的には調査研究によるバックデータの取得や理論武装が必要であろう。一方で、海洋タンパク資源を産業的に供給する仕組み、すなわち養殖のような再生産の仕組みを考えなければならぬ時期に来ているのではないか。
- ・養殖の問題はエサの高騰。今後、中国などで養殖が拡大されるとエサとなるイワシが不足する事態が起こる。
- ・資源の持続可能性についてはSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）が2015年に国連サミットで採択されており、各省庁の概算要求にもある。これを大きな流れとして意識しつつ、例えばSDGsにある2030年の目標を更に前倒しするマイルストーンを描くことも考えられる。また、ヨーロッパではIUU（Illegal, Unreported, and Unregulated：違法、無報告、無規制）の不買の動きもある。
- ・資源管理しながら漁業を商売として成り立たせていけるか、岐路に来ているかもしれない。声を上げることは重要であり、県民会議が立ち上がってから周辺にも変化が見える。
- ・クラウドファンディングは資金以上に共感者を集めることが重要であり、どのような訴求ポイントを立てるかが課題。高知だけに限定されるような内容や、国益の衝突を感じさせることは好ましくない。支援者の巻き込み方として参加要素（例えばマイピンガーなど）のような設定が重要。

- ・早稲田大学の真田康弘客員講師の講演では、クロマグロの保護に日本が消極的なためカツオについて取り合ってもらえない、国際交渉には信頼が大事である、などの問題が提示された。国際会議に出す前に諸外国とのフレンドリーな交渉によるロビー活動がやはり求められるのではないか。
- ・カツオについては戦線が3つある。北緯20度線のミッシングリンクが一つ。カツオに対する無関心がもう一つ。加えて、国内の巻き網業者も戦線の一つ。これらの認識に立った上でWCPFCに我々が行くことにが重要。さらに県及び知事も行くべきではないか。
- ・WCPFCに県も行く。議会のため知事は難しいが人選は考える。
- ・WCPFCへの参加者、スケジュール、行程等は誰が取りまとめるか。チケット手配はANAセールス(株)高知支店の後藤支店長がされる。参加者については、事務局から幹事会を通して、各分科会から募る。ロビー活動に使う資料についても幹事会で協議する。
- ・カツオの危機は日本食の危機でもある。資源の問題だけでなく、食文化の維持としても問題を捉えた方がいい。また、投資効果の観点から、ピンガー等に要する経費と養殖技術確立のために必要な経費では、どちらが効果的か。将来的に、我々が食べるカツオの〇%は養殖で賄っている、などとするトータルな観点が必要ではないか。
- ・現在の漁業のあり方は、エサ10kgで魚体1kgを太らせている。もっと工業的な生産方法を考えなければならない。
- ・IoTやAI、様々な先端技術など、あらゆる手段を模索して解決策を考えなければならない。持続可能性を踏まえた再生産の仕組みも含めて考える必要がある。
- ・我々は何に拘ってカツオの資源管理を訴えるのか。訴求性を強く意識しなければならない。
- ・世界無形文化遺産で和食が認定された。例えば健康に対する和食の効果なども訴求材料。
- ・漁業の工業化は今後必要であろう。ただ、魚は獲れる場所も重要である。各地域に船員が居て、地域ごとの漁業を営む方々がいる。
- ・今後カツオの養殖の必要性はあろう。ただコスト面に課題が多い印象がある。
- ・過去の衛生画像を使って白湧きは確認できる。来年度の水産庁の概算要求で出来るのではないか。技術的にはカツオだけでなくクロマグロにも使えるかもしれない。もともと水産庁の概算要求事項として上がっていたものであるが、実施者がいなかった中で当事業部でやろうという話になっている。本分科会をきっかけとして実現したものである。
- ・損益分岐点の考え方もある。ただ、漁獲量だけでなく入漁料の変化など外的要因も多い。
- ・産業合理性と文化・嗜好を同時に議論することは難しい。
- ・少なくとも来年11月をひとつの区切りとすると、何を目指してどこまでやれたか、明示したい。キーワードとしてカツオを中心とした食文化を守りたい、後世に残したい。これを立ち位置として、現在の危機的状況をどうするか。SDGsや再生産を長期的視野に見据えつつ、今何をすべきか。例えば、北緯20度線の問題や、無関心の問題、まき網の漁獲圧力に対する警鐘。これらを県民会議として訴えらるとともに、出来ることとして調査では、例

えばクラウドファンディングによるマイピンガーや受信機の設置など。加えて、WCPFCの参加、GPSによる白湧きの解析についての取り組みなどを分科会として提案する。これらへの異論や他に盛り込むべき内容などもあるであろうことから、本日の話を受けて、提言とロードマップの案を作る。それをもとに次回更にご意見いただくようにしたい。お認めいただければ、分科会としての提言とし、その次の会議（WCPFC 後）から、実際に行動計画を動かす議論をしたい。

- ・政治による調整、産業・経済的な視点に基づくアプローチ、補強する意味で文化的アプローチ。これらを我々は仕分けして提言に繋げていくべきである。
- ・最終的なゴールイメージからバックキャストでロードマップを作る。短期的に加えて、中長期的なロードマップも本来は必要である。次回は短期的テーマを提示すると共に中長期についても頭出しし、短期的テーマを進めていくプロセスの中で中長期的なテーマも同時並行で作り込んでいく進め方かどうか。
- ・中長期的な目標があれば漁業者としても、たとえ短期的に獲れなくても納得はされるかもしれない。
- ・カツオを養殖できたとしても餌の問題がある。逆に言えばここがブレークスルーの求められるテーマであり投資ポイントかもしれない。現状、植物性ではほとんど育たない。研究は進めている。カツオの産卵に関する文献等を集めてほしい。

次回、第6回分科会を11月6日（月）に開催することとして散会した。